

ゆみと桃が描いていた計画とは大きく狂ったようだ。その結果、次のシーンで登場するのは、風呂場の中で女3人が協力して「じじい」の肉体を切り刻み、箱詰めするシーン。3人の美女が血まみれになり、臭い臭いと言いながら死体を切り刻むサマは、そりゃすごい迫力。しかし、これでは到底保険金の請求は無理・・・？

本作のキーワードは「ドゥオーモ」！

バー「あゆみ」は再開発から見放された東京近郊、私鉄沿線のとある街にあるらしいが、この「営業方針」なら客、とりわけスケベな客はいくらでも呼べるのでは？そのポイントは、れんが演ずるセクシーなポールダンス。本作はタイトルどおり、佐藤寛子の素っ裸になった肉弾演技が売りモノ（？）だが、音楽に合わせた悩ましいれんのポールダンスはそりゃ見モノ。映画後半に見るところでは、どうもその「延長」もありそうだから、もし再開発から見放された大阪近郊のとある街にこんなバーがあれば、私も一度は行ってみたいもの。もっとも、映画後半に見るようなトラブルに巻き込まれるのはごめんだが・・・。

そんな私の思いとは異なり、桃とあゆみはこんな生活に満足しておらず、あくなき金への執念を持っていることが会話の端々から明らかになる。桃とあゆみが目指しているのは、保険金殺人。冒頭に登場した「じじい」も、桃の色気でいい関係になり、保険金をかけて、時期を待って殺す。それを自殺に見せかけるために遺体を富士山麓の自殺の名所、青木ヶ原の奥地に運び、そこで骨になるまで放置するという周到な計画のターゲットだったようだ。桃とあゆみは、遺体を放置して骨にすることをワインの熟成にたとえて“熟成させる”と呼び、熟成させるための青木ヶ原の奥地をキリスト教会前の広場を意味する“ドゥオーモ”と呼んでいるが、「ドゥオーモ」ははじめて聞く言葉。しかして、遺体を熟成させるドゥオーモとは一体どんなところ？

冒頭からそんな点に興味津々となるが、本作のラストに訪れるクライマックスではそのドゥオーモを舞台とした壮絶な闘いが展開されるから、それに注目！

映画なればこそその奇跡だが、その後の行動は？

映画は創造の芸術だから、常識的にはありえないことでも説得力さえ伴っていれば何でもあり！れんから「父親の散骨の時にまちがってバラまいてしまった形見のロレックスを捜してくれ」という依頼を受けた、何でも代行の紅次郎（竹中直人）が砂浜で針を捜すような苦勞の末、偶然それを発見するシークエンスを観ると、そう思ってしまう。とことん「性善説」に立つ何とも不可思議な男・次郎を、いつもながらのオーバーな演技で竹中直人がそれなりの説得力を持って演じている。

そこまでは「ラッキー！」でいいのだが、その後の次郎の行動は大問題。弁護士と同じように代行屋も依頼者の秘密を守ることが大切だから、きっと「ウソだ」と思っている、そこに踏み込むことは職業上御法度のはず。したがって、次郎がロレックスの付着物を調

べてくれと女刑事の安斎ちひろ（東風万智子）に頼んだのは、明らかに依頼者との契約違反であり、信義に反する行為。もっとも、次郎のそんな行動によってロレックスに付着していたのが人肉だとわかり、以降次郎がGPSケータイによって安斎刑事の監視下に置かれ、本作のストーリー構成は緊迫感を増していくことに……。そう考えると、映画としては職業倫理に反する次郎のそんな行動は不可欠？



(C) 2010 映画「ヌードの夜 / 愛は惜しみなく奪う」製作委員会

「エースのジョー」、今なお健在！

「日活ニューフェイス第1期生」と聞くと、1960年代はじめの中学時代に3本立て55円の日活映画を観ていた私には懐かしい。1954年の「日活撮影所ニューフェイス第1期生」の1人が穴戸錠。

冒頭の「じじい」殺人事件とバラバラ切り刻み事件、そしてその廃棄事件の展開を観ていると、明らかに長女・桃と次女・れんの「格差」が明らかになる。また映画中盤でも、穴戸錠演ずるれんの父・山神直樹が、「あゆみ」の店に登場すると、たちまち店全体に緊張感が走るが、それは一体なぜ？世の中には到底理解できない理不尽なことが多いが、石井隆監督が描く父親と娘との想像を絶する理不尽さとは？

それを代行屋の次郎と共にじっくり掘り下げていくのが本作のメインだが、「とことん性善説」の次郎に対比される、「とことん性悪説」の山神を演ずるのはかなり難しい。それを1933年生まれの穴戸錠が見事に演じている。演技とはいえ首を吊られて死ぬシーンはイヤだと思うが、まあここまで恨まれた娘たちの手にかかるのなら、それも本望……？

女優はこんな映画でこそ大成長！

2010年9月の第34回モントリオール世界映画祭で『悪人』(10年)の深津絵里が最優秀女優賞を受賞したのはお見事だが、2010年2月の第60回ベルリン国際映画祭で最優秀女優賞を受賞した寺島しのぶの『キャタピラー』(10年)に比べれば、ことセックスシーンに関しては深津絵里はまだまだお嬢さん？しかして、『花と蛇』(03年)『花と蛇2 パリ/静子』(05年)を監督した石井隆監督が、れん役の佐藤寛子に要求したフルヌードの演技は深津絵里レベルではなく、まさに寺島しのぶレベルだ。

前半で見せるポールダンスのセクシーさにも驚いたが、次郎と2人で過ごすシークエンスで、長々と続く佐藤寛子の裸の演技はそりゃ見モノ。ヘア丸見えを厭わず、ここまで堂々かつ長々と肉体をさらけ出すのは女優として相当な覚悟がいるはずだが、さすがに石井隆監督の演出力はすごい。なるほど、女優はこんな映画でこそ大成長！

2010(平成22)年9月16日記

モントリオール世界映画祭最優秀女優賞おめでとう！

1)2010年2月のベルリン国際映画祭で、『キャタピラー』(10年)の寺島しのぶが銀熊賞(最優秀女優賞)を受賞したのに続いて、9月のモントリオール世界映画祭では『悪人』の深津絵里が最優秀女優賞を受賞！深津は鈴木京香と同じように(?)美人にすれぱいくらでも美人に、地味にすれぱいくらでも地味になれる不思議な女優だ。現在放映中のNHKドラマ『セカンドバージン』で濃厚なラブシーンを見せる鈴木は前者だし、『39[刑法三十九条]』(99年)の鈴木は地味というより恐いほど暗かったから後者。他方『踊る大捜査線』シリーズや『ザ・マジックアワー』(08年)の深津は前者だし、第27回日本アカデミー賞で最優秀助演女優賞を受賞した『阿修羅のごとく』(03年)は後者だった。しかして『悪人』の光代は地

な役の典型！一方で金持ちのボンポンをゲットしようとしながら、他方で出会い系サイトでお小遣いを稼ぐ性に奔放な女の子を満島ひかりが演じたことによって深津の地味さが余計目立ったから、李相日監督の配役は絶妙。

2)地の果ての灯台という設定には多少違和感があったが、深津の内面の演技はお見事だった。楽しいだけの映画では演技派女優の心の内面はもちろん、服の内面もみることにはできないが、『悪人』では逃避行を続ける2人にできることは、心の温かみとともに身体の温かみを感じ合うことだけ。そんな映画なればこそ、深津の濃厚なベッドシーンを拝むこともできた。彼女には今後、明るく楽しくよりも、地味系シリアス系で独自の境地を切り開いてもらいたい。

2010(平成22)年10月30日記